

信仰と行為

神の働きと人間の応答の関係



申込用QRコード

2024年
11月9日
(土)

①10:25～10:30

挨拶

川中 仁

上智大学神学部教授

／上智大学キリスト教文化研究所所長

②10:30～12:00

アブラハムの信仰をめぐる

—パウロはアブラハム物語をどう読んだか—

山口 希生 日本同盟基督教団 中原キリスト教会牧師

③13:30～15:00

ルターにおける恵み・信仰・善き業

江口 再起 ルター研究所所長

④15:15～16:45

「巡礼者」イグナチオ

イグナチオ・デ・ロヨラの

『自叙伝』にみられる信仰と行為

川中 仁 上智大学神学部教授／上智大学キリスト教文化研究所所長

【開催方法】 会場（定員50名）+オンライン（Zoomウェビナー）

【会場】 上智大学中央図書館8階L-821会議室

【申込方法】 申込用URLまたはQRコードよりお申込みください。＊電話での申込受付不可
<申込用URL><https://forms.office.com/r/3gV4LsJxAk>
<申込受付期間>10/1(火)～10/25(金)

【聴講料】 一般1,000円/学生800円 ＊銀行振込/ 詳細は申込受付後に別途案内

＊最新情報は研究所HPにてお知らせいたします。

信仰と行為

神の働きと人間の応答の関係

聖書的信仰とは、神の側からの働きかけとそれに対する人間の側の応答という二つの基本的かつ不可欠な構成要素からなる双方向のコミュニケーションである（マ1・15 参照）。聖書的信仰は、常にこの二つの基本的な構成要素によって成立し、どちらの要素が欠けても成立しない。だが、この二つの基本的な構成要素の関係については、様々な時に相対立する見解があり、常に議論的となってきた。2024 年度の聖書講座では、「信仰と行為」という総合テーマのもと、様々な観点から聖書的信仰における神の働きと人間の応答の関係の問題に取り組んでみたい。

アブラハムの信仰をめぐって —パウロはアブラハム物語をどう読んだか—

山口 希生／日本同盟基督教団 中原キリスト教会牧師

「信仰と行為」という問題を考える上で、新約聖書の著者たちは「信仰の父」と呼ばれる族長アブラハムの信仰に着目した。とりわけ使徒パウロと「ヤコブの手紙」の著者はアブラハムの信仰を例に引きながら義認論を展開している。だが、アブラハムの信仰をめぐっての彼らの主張は真逆のように見える。パウロは創世記 15 章に見られるアブラハムの「行いなしの」信仰に基づいて義認論を展開し、対照的にヤコブは創世記 22 章のアケダー（イサク奉献）におけるアブラハムの全き従順を鑑として「行いと共に働く」信仰の重要性を訴える。ヤコブだけでなく、他の新約聖書の著者や七十人訳聖書の著者たちもアブラハムの信仰を論じる際に必ずアケダーに言及する。だがパウロはアケダーには決して触れない。それはなぜか？アケダーが「行いなしの義認」というパウロの主張にそぐわないためか。本講演では創世記のアブラハム物語を詳しく分析し、パウロがそれをどう読んだのかを考察していく。

ルターにおける恵み・信仰・善き業^{わざ}

江口 再起／ルター研究所所長

ルターにとって、いやキリスト教にとって、いやいや宗教にとって、「信仰と行為」というテーマは最大問題の一つである。信仰と律法、信仰と倫理と言ってもよい。

さて、ルターの標語の一つは「信仰のみ」である。信仰こそが全て。しかし、果たしてそうか。信仰の強調が、ある場合、行為の軽視をまねき、悪しき静寂主義を結果した。

そこで、改めてルターの名著『善き業について』（1520年）を読んでみたい。ルターは何を語っているのだろうか。我々が「信仰と行為」と設定したテーマの枠組みそのものが、大きく見直されている。恵みの再発見である。ルターの原点である。

最後に、この問題を、ルターと比較しつつ親鸞について考えてみたい。ルターと親鸞。彼らは何を考え、生きたのか。現代の我々の問題として考えてみたい。

「巡礼者」イグナチオ イグナチオ・デ・ロヨラの『自叙伝』にみられる信仰と行為

川中 仁／上智大学神学部教授・上智大学キリスト教文化研究所所長

イグナチオ・デ・ロヨラの『自叙伝』は、イグナチオ本人の執筆した自叙伝ではなく、1521年のいわゆる「回心」の出来事から1538年までのイグナチオの体験について、初期イエズス会員のルイス・ゴンサルヴェス・ダ・カマラが、晩年のイグナチオから聞き取り、まとめたものである。そこは、超越論的人格的他者としての「神」とイグナチオとの間で起きた出来事が物語られ、神の圧倒的な働きによって変えられてゆくイグナチオの姿が詳細に描かれている。その変容の過程は、決して真っ直ぐな道のりではなく、「回心」で神との出会いを体験してから、神の真の望みを求めて試行錯誤しながら模索する魂の遍歴の軌跡である。同時に、その変容の過程の中で、イグナチオは、神からの働きかけを見極める「識別」とそれに基づく具体的な行動を選び取る「選定」の方法を体得してゆく。『自叙伝』では、その変容の過程が巡礼として理解され、イグナチオも自らを「巡礼者」と称している。講演では、「巡礼者」イグナチオが、神との出会いと交わりの中で少しずつ変えられ成長してゆく姿をたどってみたい。